氏名・（本籍地）	佐々木和子（東京都）
学位の種類	博士（人間学）
学位記の番号	乙第 90 号
学位授与の日付	平成 29 年 3 月 15 日
学位論文題目	母親の出産方法の選択と出産体験：その後の健康状態と育児に関する縦断的研究―妊娠期から産後 1 年の自然分娩群と硬膜外麻酔使用による無痛分娩群の比較―
論文審査委員	主査　森岡由起子 副査　内山登紀夫 副査　前原澄子

佐々木和子 氏　学位請求論文審査報告書

「母親の出産方法の選択と出産体験：その後の健康状態と育児に関する縦断的研究―妊娠期から産後 1 年の自然分娩群と硬膜外麻酔使用による無痛分娩群の比較―」

論文の内容の要旨

本論文は、以下のように構成されている。

第Ⅰ部　わが国の出産を取り巻く状況の変化

第 1 章　出産場所の変化

第 1 節　自宅内出産から施設内出産へ

第 2 節「出産満足度」への注目と動向

第 3 節「満足な出産」に対する産婦の解釈とニーズの変化

第 4 節　産婦たちの混乱と助産ケアの動向

第Ⅱ部　無痛分娩

第 2 章　無痛分娩について

第 1 節　無痛分娩とは

第 2 節　無痛分娩の歴史

第 3 節 無痛分娩の現況
第 4 節 無痛分娩に関するわが国の先行研究

第 3 章わが国の無痛分娩の増加要因

第 1 節 がん領域における痺痛対策と進歩

第 2 節 妊産婦を取り巻く環境の影響

第 4 章調査施設 A 施設における無痛分娩

第 1 節 出産希望者および無痛分娩希望者の増加
第 2 節 無痛分娩法の情報提供の実際
第 3 節 無痛分娩の実際
第 4 節 A 施設の臨床助産師による実践研究報告
第Ⅲ部 研究の目的と方法

第 5 章研究目的

第 6 章調査研究

第 1 節 研究目的・方法
第 2 節 研究の構成
第 3 節 質問紙調査
第 4 節 家庭訪問調査
第 5 節 分析方法
第 6 節 倫理的配慮　利益相反

第 7 章質問紙調査 各質問紙の概要

第 8 章質的調査

第 1 節 家庭訪問による面接
第 2 節 面接の分析
第 3 節 自由記載と分析

第Ⅳ部　結果　考察

第 9 章質問紙調査

第 1 節 背景
第 2 節 出産・夫立会い出産および無痛分娩に対するイメージ
第 3 節 胎児に対する愛着
第 4 節 母性心理
第 5 節 被養育体験
第 6 節 心身の健康状態
第 7 節 出産の総括と産後の経過　母子の体調
第 8 節 出産体験
第 9 節 赤ちゃんに対する愛着
第 10 節 育児態度

第 10 章 家庭訪問調査

第 11 章 自由記載

第Ⅴ部 総合考察

第 12 章 本研究の意義

第 13 章 今後の課題と本研究の限界

審査結果の要旨

産科医師の田中（2000）は、1970 年代から希望する全産婦に対し無痛分娩法を用い、分娩時の苦

痛を取り除くことは満足な出産につながり出産のトラウマを防ぎ女性たちが希望するだけの子どもを産もうとすることを支え、最良の少子化対策になると述べている。2000 年、今回調査対象施設となった新設された大型周産期医療施設（以下 A 施設）では、総出産件数とそのうちに占める硬膜外麻酔使用による無痛分娩の割合が急激に増加している。A 施設の無痛分娩法は、自然の陣痛開始後、入院、分娩進行に沿って無痛麻酔を導入する方法で、「自然陣痛型の無痛分娩法」として妊産婦には好評である。本邦の無痛分娩出産率は全出産の 2.6%であるのに、2013 年の A 施設での総分娩数 2150 件のうち無痛分娩は 900 件で、約 42%におよんでいる。(施設年報：業績集第 12 号)。本研究は、自然分娩予定群、無痛分娩予定群の特徴を探索し、出産ケアや育児支援に資するべく、両群の背景、ニーズ、出産体験、産後の心身の健康状態や育児の特徴を、妊娠期から産後 1 年にかけての縦断的に追跡したものである。

わが国において自然分娩群と無痛分娩群を比較した縦断的な研究報告はこれまで見当たらず、貴重な研究といえる。

以下に内容の要旨を記述する。

＜研究目的＞

A 施設において、自然分娩法および無痛分娩法により出産した者の背景・出産方法の選択・児に対する愛着・出産体験、縦断的な精神健康状態および育児態度を比較し両群の特徴を探索することが本研究の目的である。

＜研究方法＞

質問紙調査法、家庭訪問による

面接調査＜用語の操作的定義＞

自然分娩：麻酔薬、鎮痛薬などの薬剤を使用しない経膣分娩とする。

無痛分娩：和痛・鎮痛を目的に脊椎麻酔・硬膜外麻酔を使用する経膣分娩とする。育児態度：具体的な育児場面において母親がとる育児行動全般とする。